

英語コミュニケーション学科の未来

村野宣男

短期大学が設立されたのは1953年であり、私が高校1年のときであった。私の父は最初の教員スタッフの一員であり、何度か学生が遊びにきたことを覚えている。父は日蓮宗の僧侶であり、当時立正学園といわれた日蓮ゆかりの本学には理事長をはじめ多くの日蓮宗関係者がいた。私が教員となったのは1970年で一般教育の哲学の授業を受け持った。研究室は雑居部屋で生物の教員が使うホルマリンの匂いが充満していたこともあった。いまだ独身だったが、幸い1973年に結婚をし三人の息子はそれぞれ社会に出た。

1985年に校舎も研究室も広々とした湘南キャンパスに移転した。1993年に一般教育の組織が解体して、わたしは英語コミュニケーション学科（当時英語・英文科）に組み入れられることになった。父は法華経の英訳（1版1974年、2版1991年）をライフワークとし、私も英語には馴染みがある。1991年から1992年にかけてドイツにカント哲学の研修に行ったのでドイツ語を少し覚えた。私が英語コミュニケーション学科に来たころはまだ1000人を超える受験生が押しかけていた。しかし、次第に少子化の波が押し寄せて、八王子の研修セミナーは日帰りのバス旅行になり、イギリスでの英語研修は取り止めになり、学外での会場で行われてきたスピーチコンテストは最後は教室で開かれた。往時は沸き返るばかりであったが、次第に静かになり今や消え去らんとしている。しかし、過ぎ去った時は無に帰すではない。過去は多くのものを生み出し現在にあり、未来へと成長しているのである。